

精しく。演習せしむと訊く。藤吉所拜膜て言状を奉る。小尾  
 初き頃より。偏ふ兵法と掛念。十四歳より遠州ある。松下が家  
 奉公して。毎夜軍講兵語と聞。心中これと熟練せしむ。別  
 演習もつらうつねと。剛文所覽ふ備へたる。菊水の陣と言せし  
 真假二ツの差別あり。を監物が傳へし。楠正成これとあり。足  
 利直義ふ傳へし。正成預て直義か。反心するを察  
 観せし。其正法と教へし。徒形容と授けし。果して  
 直義謀殺せし。新田義貞ふ宣言と賜り。直義と伐し  
 する時。正成義貞ふり。直義斯くの陣と布。如くふ  
 して破られし。教ふ違ふを箱根の軍ふ。十六騎とめて彼陣  
 と破て直義と追伐せり。且小尾が布する陣も楠正成の遺

法もて。菊水の陣とりせむ。是は直義ふ傳へし。法と異なり  
 て。正成一期秘し。これ尋常の兵學者の存する所ふあらざり。誠  
 誠ふ進退自由して。百戦百勝の法也。然るが正成の陣は  
 時代へのまじ。世上ふ鳥銃も。鎗もあれども。最短う。然るが  
 攻も又守も。今と小同大異なり。近代の武士は鳥銃と專一  
 ちて行ある。臍槍の三間柄あり。其心て攻も又守も増  
 減あり。陣法もぐ圖もどられども。實の軍の如くも。あり  
 り。只時ふ應へ。變ふ隨ひ。兵士の指揮とを肝要なれ。言状  
 けり。織田殿始め。諸老臣も感佩を。尾張の國の大軍師に。  
 木下ありと賞美せり。然るが永祿三年の春も。夏も。あり  
 ければ。織田家の諸士達。今川が上洛の事と所。數度評定の